

インドの仏教遺跡について思う

—— 第一回「インド仏教遺跡海外研修」の実施を記念して ——

小 川 一 乗

おはようございます。皆さんが二回生となられてまして、仏教学専攻であるということで、自動的に大谷大学の仏教学会の会員となったわけです。従いまして、これからは、ただいま説明がありましたような学会活動に積極的に参加をしていただかなければなりません。会員として学会費を収めるわけですから、皆さんの中には、収めるというよりも取られるという意識の方もあるかもしれませんが、ともかくも、今年より学会費を収めて会員となられたわけですから、これからの学会活動、研究発表会とか講演会とか史跡踏査とか、それらに積極的に参加していただきたいと、そのことを先ずお願い致します。

本日は、仏教学会の方針に従いまして、学会の会長が、新入会員の皆さん方を歓迎して、講演をする、仏教学に関わる話をする、ということになっておりまして、たまたま今年は私が仏教学科の主任ということで、これまた自動的に仏教学会の会長ということにもなり、ここにこうして立って何かお話をしなければならぬということになっていくわけです。今年二回生となられた皆さん方は、幸か不幸か、私の話を聞かなければならないという巡り合わせになったわけですが、ともかくも、最後までご清聴下さいますようお願い致します。

皆さん方は、一回生のときには英語の外にフランス語とかドイツ語とか語学に悩まされ、それをクリアして、中に

は半分しかクリアしていない方もいるかもしれませんが、ともかくもそれをクリアして二回生となったわけです。ところが、二回生になりますと、仏教学科を専攻されたということで、今度はそれらに加えてサンスクリット語文法を勉強しなければなりません。このサンスクリット語文法をクリアしなければ三回生になれないという第二番目のハードルが待っているわけです。しかも、そのサンスクリット語文法も、皆さん方に集中的に勉強してもらおうと、週二時間、一週間に二回というカリキュラムになっています。本当に大変な学科に入ってしまったと後悔している方もいるかもしれませんが、それも皆さん方の為を考えたとのことですから、どうか精一杯頑張ってください。サンスクリット語文法というハードルを優秀な成績で飛び越えていただきたいと思います。そして、その精一杯の努力が、仏教学を積極的に学ぶ原動力となって、皆さん方の大学生活という青春の一頁を飾っていただきたい。仏教学という学問は、皆さん方の青春の一頁を飾るにふさわしい素晴らしい学問であることはいままでもありません。

これから「インドの仏教遺跡について思う」ということでお話をさせていただきます。このようなテーマでお話をさせていただくについては、すでに皆さん方に説明とか案内とか紹介とか様々な形で情報が入っているかと思いますが、今年の八月と九月に、私たちの第一研究室、第一研究室は真宗学科と仏教学科とから成っていますが、この私たちの研究室と短期大学の仏教研究室との二つの研究室が主催するインド仏教遺跡研修という海外研修旅行が実施されようとしているからです。これは、仏教学科にとりましてはもとより、大谷大学にとりましても、いまだかつてない画期的な試みであります。予定としては、実際にはどの程度の参加人数となるか分かりませんが、二百名以内の範囲で実施しようと着々と準備を進めております。ぜひ参加していただきたいと思えます。

実際に私たちが仏教というものを勉強しようとするときに、肌でインドに触れるということがどれほどプラスになるかということは、これはインドに旅した者、その仏教遺跡を訪れた者であれば、誰しものが実感として持っているわ

けです。いうまでもありませんが、仏教を勉強している者はハワイやヨーロッパへ行こうと言ったら、どうでしょうか、誰しもがチョット首を傾げて説明を求めめるのではないでしよう。しかし、仏教を勉強している者はインドに行くと言ったら、誰しもが説明しなくても納得するのではないでしようか。説明不要な程の密接な関係を、私たちは今まで確かめないうたわけです。一種の怠慢といわれても仕方のないこととさえ言えます。

ともかくも、私個人としてもかねてからの念願でありました、インド仏教遺跡の海外研修ということが、二つの研究室の主催という本学の公的な機関によって実施されるにあたり、何度かインドの仏跡を旅した私の経験の中から、二、三の事柄について、時間の許す限りお話しして見たいと思います。なお、昨年度の私の「総合Ⅱ」の授業を受けた方も、皆さんの中におられるはずですが、その授業で同じような話を聞いたなと思ひ出す方もおられると思いますが、ご辛抱いただきたいと思ひます。

今回の旅行では、まずカルカッタからインドに入ります。インドの仏跡を研修するということは単に仏跡を巡るということだけでなく、インドそのものに触れるということが非常に大事だと思ひます。その意味でカルカッタという都市は、インドの京都ともいうべきベナレスとともに最もインド的だといえます。私たちは、人間として社会に生活しているわけですが、何らかの自分の尺度・物差しを持っているわけです。その尺度の長さや大きさは個人によって多少異なりますが、日本人としての尺度という範囲内でお互いに納得し合っているわけです。何とかその物差しは間に合っているわけです。ところが、インドという国を訪れますと、今までお互いの間で間に合っていた尺度が間に合わなくなるといふ、そういう事態に出会うわけです。今まで日本において、大団間に合っていた尺度、生きるということとはこんなものだ、大学を出るといふことはこんなものだ、就職をするといふことはこんなものだ、まあ人間の一生なんてこんなものだ、自分の尺度で決め込んでいたその尺度が疑わしくなる、今までこの尺度でいいのだと思ひ込

んでいたその尺度が間に合わないものに出会ったとき、どうしてもショックをうけます。それをカルチャ・ショックなどというのでしょうか。カルチャ・ショックというのは、今まで確かなものである、或いはこんなものである、と思いついていた自分の尺度が使用不可能となった状態だといえます。そして、その尺度が一度崩壊してしまふとき、今まで見えなかった世界が見えてくる、言い換えれば、もっと豊かな尺度を持つことができるようになる。インドを訪れると、まずそういうことがあるわけです。

これをどのように説明すればよいかということになりますが、説明して説明できないことはありません。いろいろな角度から多くの人によってすでに説明されています。しかし、説明ではだめなのです。皆さん方が実際にインドを訪れインドの大地を踏みしめ、インドの人々に接し、その風土の中に身を置き、その匂いを嗅いで、それは実感されてくるものです。それに勝る説明などないわけです。従って、インドに行きますと、誰しも自分の生き方を真剣に考えざるを得なくなり、考えれば考える程、ショックを受けるわけです。

たとえば、自分の尺度で1+1=2だと思いついていたら、それが0になったり、時には、3や4になったりする。要するに、いままでの尺度が壊れてしまうわけです。そうすると、自分の尺度に何か欠陥があるのではないかと考えざるを得なくなる、そういうものに出会うわけです。そこにインドを訪れることの最も大切な意味があるわけです。私たちは経済大国日本という社会の中で、知らず知らずの間に、何か大切なものを見失っているわけです。その大切な何かとは何か、それを言葉で語れば、種々様々に表現することができるでしょうが、それを言葉で聞くよりはインドで実感して、自分の血となり肉となるようにしていただきたい、そのことが非常に大切であろうかと思えます。

次に、インドの仏教遺跡を研修するときに、どうしても欠かせない一人の存在者、その人の残した事蹟についてお話ししたいと思います。この人がいなかったならば、現在の仏跡のどれ程が明らかになっていたかは疑問です。例えば、

今回のインド旅行はカルカッタから入国しますが、そのカルカッタのインド博物館とか、或いは、釈尊の初転法輪の地サルナートなどに行きますと、アショーカ・ピラー(Aśoka pillar、アショーカ王の石柱)というものがありませんが、それについてのお話であります。

実は、仏教がインドに起こりましてその仏教が、世界の仏教としての世界性を持つきっかけを作ってくれた人が、アショーカ(Aśoka、阿育、無憂、在位 BC. 268-232 頃)という王様です。この人はインドのマガタ(Magadha)国のマウルヤ(Maurya)王朝の第三代目の王様です。このアショーカ王によって、それまで多くの部族が割拠していたインドが初めて一つの国として統一されます。ところで、マガタ国というのは、実は、仏教の教主である釈尊と全く無関係な土地柄ではないのです。少し横道にそれますが、ご存知のように釈尊は釈迦(Sakya)族の出身です。釈迦族というのは、現在のインドとネパールの国境の当たりに在った小さな部族ですが、釈尊がその釈迦族の世継ぎ(皇太子)として生まれたということにはすでにご存知であろうかと思えます。そして皇太子の位を捨てて出家して、後に正覚を開いて仏陀となったわけですが、その釈迦族は釈尊の在世中に隣のコーサラ(Kosala)国によって滅ぼされてしまいます。ところで、釈尊の仏教に王様としては一番初めに帰依した人といえ、それが今回の研修旅行でも訪れる王舎城(Rājagaha)の頻婆沙羅(Bimbisāra)王です。この父王を殺して王位を奪ったのが息子の阿闍世(Ajātasattu)です。仏教に深く帰依した父王を殺して国王となったことで、阿闍世は、仏教の内部では最初は大変な悪人とされますが、前非を悔いて仏教に深く帰依したとされています。例えば、『観無量寿経』や『涅槃経』に、この阿闍世の物語が説かれています。父王を殺し母を死に追いやったのですから悪人には違いないが、彼のしたことはそれほど特別なことではなかったのではないかと思えます。彼は父王を幽閉し王位を奪いますが、国家とか政治というものはそういうもので、今の国王に国を任せておいてはどうも危険である、国家の行く先が危ぶまれる、ということでも重臣たちが王子に期待して、そこで王子を擁立して国王の位を奪う、その結果として国王を殺すということであり、このようなこと

はインドの歴史においてもそれほど珍しいことではなかったのではないかと思われるからです。アシヨーカー王も晩年は息子に幽閉され王位を奪われます。日本の歴史においても、例えば、先年人気であったテレビドラマや映画の『天と地と』でよく知られているように、武田信玄は父を追放して自分が取って替わったわけです。そのように正義の名のもとで王位を奪うわけです。ともかくも、この阿闍世は、釈迦族を滅ぼしたコーサラ国を滅ぼし、かれの時代に首都を王舎城からパータリプトラ (Pataliputra) に移します。政治家としてはなかなか積極的な国王であったと思われる。この頻婆娑羅から阿闍世へ、王舎城からパータリプトラへというこの国がマガタ国です。そして、これからしばらくして、マガタ国の中のマウルヤ王朝というものがチャンドラグプタ (Chandragupta) という人によって始まり、やはりパータリプトラを首都とします。その三代目のアシヨーカー王のときにインドの統一ということが成し遂げられたわけです。釈迦族を滅ぼしたコーサラ国をマガタ国の阿闍世が滅ぼし、そのマガタ国からマウルヤ王朝が築かれ、その三代目のアシヨーカー王がインドを統一し、仏教に深く帰依したということになります。

ところで、このマウルヤ王朝というのは、ガンジス河中流域のマウルヤ (モーリヤ) 族による王朝だということですが、このマウルヤ族は伝統的な正統バラモンからはクシャトリア (政治的な支配者階級) とは認められていなかった。すなわち、アーリヤ人の氏族の間とは認められていなかったようであり、それをクシャトリアとしたのは後代の捏造であろうということのようです。話は横にそれますが、釈迦族もアーリヤ系の民族だといわれておりますが、これも後代の捏造ではないかと考えたりします。そもそも釈尊についてのイメージは、現在のパキスタンの北部のガンダーラ地方に紀元前後にはじまったガンダーラ仏教美術によって、それはヘレニズム・ローマ文化の影響を受けたギリシヤ風のアポロン仏、すなわち、ギリシヤのアポロンの神々を刻んだ彫刻技術の影響を受けた仏教彫刻でありますが、それによって、釈尊の顔形が刻まれ、それがカイバル峠をこえてシルクロードを通じて世界に伝播したわけです。日本に伝来した仏像もそのガンダーラ美術によって造形された釈尊像であり、このガンダーラにおいて造形され

た仏像の流れの中にあるわけです。ところで、このようなガンダーラ美術の仏像によってイメージされる釈尊の顔形のモデルは、現在のパキスタンに行けばどこにでもいるわけで、それは当然のことといえれば当然ですが、現在のパキスタンに住む人々がその民族の流れの中にあるからです。しかし、この地は釈迦族の居住した地から遠く離れているわけです。そうすると、実在した釈尊の顔形はもっと別ではなかったかと想像することは、それほど無理なく許されると思います。特に、インドとネパールとの国境のあたりに存在した釈迦族ということで想像すれば、案外、釈尊はネパール人に近い顔形をしていた、すなわち、われわれに近い顔付きをしていたのではないかとさえ考えられないでしょう。残念ながら、このことを学術的に証明する手掛かりは今のところありませんが、同じころに中インドのマトゥラー地方において仏像が刻まれるようになりますが、その仏像の顔形はガンダーラのそれとは随分相違していますから、少なくとも、実在した釈尊は、私たちのイメージの中にあるガンダーラ地方において造形された、あの様な顔形をしていなかったということだけは確かではなからうかと思われまます。アショーカ王のマウルヤ族も正統バラモンからはクシャトリヤとは認められていなかったということが、研究者によって報告されているのであるから、その近くの地方に釈迦族も存在したわけですから、なおさら空想が羽ばたくわけです。

本題にかえりませんが、アショーカ王が即位したのが、紀元前二六八年、そして二二二年まで三六年間王位に就くわけですが、このアショーカ王によってインドの国家統一がなされたということも非常に大事なことです。それよりもさらに大事なことは、その国家統一の後の彼の生き方が素晴らしいのです。彼が国家統一を成し遂げるための最後の大決戦がカリンガ (Kalinga) という大国との間に行われます。カリンガ国との大決戦に勝ってアショーカ王はインドの国家統一を成し遂げたわけですが、このカリンガという国がどれほど大きい国であったかということについては、ギリシヤ人のメガステネース (Megasthenes) の『インド誌』に記録されているわけです。メガステネースは、紀元前

三世紀ごろに、シリア王のセレウコスによって大使として派遣され、首都のパータリプトラに長期滞在した人ですが、彼の記録によると、当時のカリンガ国は六万の兵隊と一千の騎馬隊と七百の象の戦車隊とを持っていたということですが。このようなカリンガ国との大決戦の末、勝利を収めるわけですが、勝ってはみたものの気がついたら、多くの兵を失い、多くの友人や家来を失い、惨憺たる結果になっていたわけです。その悲惨な状況に心を痛め、後悔したアシヨーカー王は、一大決心をして、政治の在り方を百八十度転換して、それまでの武力による勝利を放棄して、ダルマ(dharma・法)による勝利を目指すということを宣言するわけです。この「ダルマによる勝利」とはどういうことか、このことについてはこれからの説明で明らかになりますが、ともかくも、アシヨーカー王は、その後、特に仏教を信奉し、仏教の聖地を巡拝し、その記念として、自分が「ダルマによる勝利」という精神の下で政治を行っていることに関する法勅を記録した記念碑をその地に残すわけです。それがアシヨーカーの石柱(pillar edict)とか摩崖(rook edict)といわれているものです。石柱というのは、十メートル前後の石の円柱の頂に獅子とか象とか牛などの像を乗せたものです。これらのアシヨーカー王の石柱については、先にも申しましたように、今回の旅行では、カルカッタの博物館やサルナートの遺跡や博物館に展示されています。また、摩崖とは、岩肌を磨いて文字を刻んだものですが、この摩崖については、デリーの博物館の玄関先に数点の摩崖を集めたレプリカが作られ展示されています。

それらの摩崖にはナンバーが付けられています。その中の第十三章に、これはとても大事な記録かと思えますが、次のように書かれています。アシヨーカー王は自らを「天愛喜見王(Devanampriya Priyadarsin)と称していますが、「諸々の天に愛されて、愛されていることを喜び、喜ばしい顔付きをしている王」とでもいう意味でしょうか。ともかく、どのように摩崖に刻まれているか。それを要約してみますと、次のように書かれています。

即位して後八年に、天愛喜見王はマガタ東南方の強国カリンガ国を征服した。しかし、その際、十五万の人が

捕虜となり、十万の人がそこで殺され、さらにその幾倍もの人が死んだ。それより以後いまはカリンガは自分の国となった。カリンガ国を合併して後、天愛喜見王は、熱心なダルマの遵奉、ダルマに対する愛慕、ダルマの教導に努めている。これはカリンガ国を征服したことに對する天愛の改悔によるものである。それ故、カリンガ国を征服したとき殺され死に追いやられた人民の百分の一、或いは千分の一の者が同様の不幸であっても、天愛は今や悲痛と感ずるのである。まことにダルマによる征服こそが最上の征服である。いまや天愛によってその領土のすべてはダルマによって征服され、人民は天愛の宣布したダルマに順っている。

と、このようにアショカ王はカリンガ国を滅ぼしたときに自分の心の痛みを摩崖に刻んでいます。この法勅の内容をもう少し敷衍して説明しますと、アショカ王は即位の後、領土拡張をすすめ、その八年後にマガタ国の東南の方にある、最後に残った強国カリンガを征服した。しかし、この戦争は数十万人もの犠牲をだすという悲惨なものであった。アショカは、特に、沙門、婆羅門などの宗教者や、道徳的に正しい生活を送っている民衆が、直接間接の犠牲となったことに心を痛め、この戦争の犠牲者の百分の一、或いは千分の一の人々が同じような災禍に会うことさえ、悲痛と感ずるに至った。そして、この後悔の念から多数の死傷者をだす武力による征服を放棄し、ダルマによる征服こそ最高の勝利であるとの確信の下で、熱心にダルマを遵奉し、ダルマを愛慕し、官吏や人民にダルマを教示するようになったと、アショカ王についての研究者は述べています。

このように、アショカ王はダルマによる政治を行った、そのダルマが仏教を指しているのかどうかは明らかではありません。しかし、ただ言えることは、彼が仏教の聖地を巡拝して、そこにアショカの石柱とか摩崖を残したという事、そういうことから、少なくとも彼がダルマという言葉によって表現しようとした精神は仏教が基本となっていた、或いは仏教は彼のいろいろなインスピレーションを生み出す根源となっていた、ということだけは間違いないと言えます。

ともかく、アシヨールカ王は、仏教の聖地という聖地のすべて、仏教に係わりのあるあらゆる土地に、その石柱とか摩崖を残したわけです。それらの中で、石柱の殆どは、イスラム教徒の侵入によって破壊されたか、自然に倒れたか、今から二千三百年も昔のことですから、完全な形で残ってはいませんが、完全な形で残され、最も保存状態のよいものは、毘舍離(Vesali)にある石柱でしょう。それは一頭の獅子を頂に乗せた六メートル程の石柱ですが、残念ながら今回のインド仏跡研修旅行の中にはこの毘舍離の地は含まれておりませんので、写真で見ただきたいと思えます。しかし、最初に申しましたように、今回訪れるインド仏跡の中のサルナートにある石柱は特に有名ですから、注意して欲しいと思います。サルナートの石柱は倒れて、柱は四、五片に折れています。その頂に乗せられていた四頭の獅子が背中合わせになった姿の彫刻はサルナートの博物館に展示されています。しかも、その獅子はピカピカに磨かれています。今から二千三百年も昔に造られたわけですが、その当時どのようにしてこのようにピカピカに磨くことができたのか、一つのナゾとされています。

このサルナートの石柱については、もう一つ大事なことがあります。この石柱の頂に乗せられていた四頭の獅子の姿がインドの国旗の下地になっているということです。インドの国旗はこれを図案化したものです。従って、アシヨールカ王は、単に仏教だけにとって大事であるだけでなく、インドの国においてもインドを初めに統一した国王として重要な位置を占めているということでしょう。このアシヨールカ王に関する歴史的な資料は沢山残されていますが、仏教内部でも、北傳仏教では『阿育王傳』『阿育王経』をはじめ、その他『雜阿含』や *Dīyāvādana* などにも見いだされます。また、南傳仏教では『島史 (*Dīpaṅśa*)』『大史 (*Mahāvamsa*)』の中に詳しく述べられています。その他、チベット仏教において編纂された仏教史の中では、『ターラナータ仏教史』がアシヨールカ王に関する諸説を総括的に収録しています。

ところで、アシヨーカー王は仏教の聖地を巡拝して、沢山の石柱や摩崖を残したわけですが、実は、それらが仏教のために極めて重要な役割を果たした、というもう一つの事柄について触れないわけにはいきません。先ず皆さんにお聞きしますが、釈尊は歴史的な実在人物だと思えますか。本当に釈尊は歴史的に実在した人物なのでしょうか。この点について、少しお話してみたいと思います。

実は、ヨーロッパの各国が東洋の植民地政策を進めようとする為に、十八世紀以降、東洋の文化や宗教の研究、いわゆる東洋学に莫大な費用をかけて、研究が進められていくわけです。その結果、ヨーロッパにおいて素晴らしい東洋学の研究成果が次々と上げられていくわけです。やはり東洋の国々を植民地化していく場合、そこに住んでいる人々の反感を買わないようにしていく為には、反抗を押さえる為には、その国々の文化とか宗教を正しく理解することが大事で、そういうことが基本にあったのであろうと思われる。それで東洋の植民地化を進める中で、仏教に対する研究も東洋学の一環として大いに進められるわけです。多分、国家政策の一環として莫大な研究費がつけ込まれたのではないのでしょうか。学問も金次第ということでしょうか。ともあれ、そのような中で、フランスの東洋学その当時の学会長であったエミール・スナール (Émile Senart) は、*仏陀傳 (Essai sur l'histoire du Bouddh, Paris, 1875)* を公にし、釈尊は太陽神話上の超人であり、歴史上の実在人物ではないと論じたわけです。私たち仏教国の者は、釈尊は実在人物に間違いないと決め込んで、本当に実在したのかどうかという学的疑問を持つまでにいたらず、それどころか、その歴史的事実性を証明する必要さえ感じていなかったということなのでしょう。ところが、十八世紀以降という時代のヨーロッパでは、キリスト教をこの地上にもたらしたイエス・キリストが実在人物か否かが問われている時代でもあったのです。やはり、キリスト教国でもそれまではイエス・キリストは実在人物であると決め込んでいたのかも知れません。特に、キリスト教では信仰上の理由からもイエス・キリストが歴史上の実在人物でなければ、キリスト教それ自体が成立しなくなりますから、この問題は大変な事柄であったといえます。たまたま、そのように

イエス・キリストの实在性が問題となつてゐるという時代の流れの中で、東洋には釈尊という偉大な宗教家がいたといふことを初めて具体的に知つたわけですから、当時の東洋学者たちは、当然、釈尊という宗教家の实在性に学的関心を持った。その一つの結果がエミール・スナールによる「太陽神話上の超人」といふ仮説であつたといふわけです。この仮説についてのエミール・スナールの識見はすばらしく、当時の学界に大きな動搖を与えたといわれています。

一時あたかも、石柱や摩崖に刻まれたアシヨーカー王の法勅が次々と発見されます。エミール・スナールは、そこに刻まれた文字、それは二千三百年程も昔の古代文字であり、しかも、方言で書かれた文字ですね、その判読に心を砕きます。その成果は、一八八一年から一八八六年にかけて、*Inscriptions de Piyadasi* (二卷)として出版されます。このアシヨーカー王の法勅は、その後多くの学者によつて解読研究されていきますが、ともかくも、エミール・スナールは、釈尊は太陽神話上の超人であるといふ仮説をたてましたが、アシヨーカー王の法勅の解読を自ら進める中で、その仮説が一つの秀れた仮説といふ範圍に止まり、釈尊の歴史的实在性は証明されていくわけです。いうまでもなく、釈尊の歴史的实在性の証明には、このアシヨーカー王の法勅だけではなく、仏教内部の資料やアレキサンダー大王のインド遠征によつてもたらされた年代に関する資料などに対する研究という、多くの研究の複合によつて、いよいよ明確にされますが、何といつても、アシヨーカー王の法勅の解読ということが、釈尊の歴史的实在性を確固たるものにしたと言えます。このように、釈尊が歴史的实在人物であることが学的に確定したのは、今から僅かに百年程前なのです。

このアシヨーカー王の法勅が残されていなかったら、その他の資料だけだったら、釈尊が歴史的实在人物であるといふことは現在ほど明確にはされていなかったかも知れません。エミール・スナールのような優れた東洋学者ですら、釈尊を太陽神話上の超人と仮説し、しかも、その仮説は高い識見に満ちたものとして評価されたわけですから、仏教にとりましてアシヨーカー王の存在は大変重要であることは重ねて申すまでもありません。さらに、アシヨーカー王はインドを統一したのち、インドの隅々に至るまでもとより、また、隣国にも仏教宣布のための使者を送っています。

これが仏教を世界の仏教とせしめた大きな機縁となったことはいうまでもありません。例えば、現在の南方仏教、南伝仏教といいますが、それはアシヨーカー王の第八番目の王子マヒンダが仏教宣布の使者として今のセイロンに遣わされたことに始まると伝説されています。或いは、インド国内でいえば、南方のナーガルジュナコンダとか、エローラ・アジャンタという地方にまで仏教が伝わったのもアシヨーカー王が国家統一を成した結果であるといえます。また、後に大乘仏教、特に、唯識仏教が栄えた、先に申しましたパキスタンのガンダーラ地方にまで仏教が伝わっていったのもアシヨーカー王の功績によるものであるといえます。このように、仏教を世界の仏教として飛躍させるその第一歩を作ったのがアシヨーカー王であったわけです。今回の研修旅行では、いま申しましたすべての遺跡を訪れることはできませんが、アシヨーカー王の石柱などを見学しながら、アシヨーカー王のことを思い出して頂ければと思います。

ちなみに、ヨーロッパでは仏教研究が盛んになりますが、釈尊の生涯についての研究も進められ、ドイツのベルリンから一八八一年に、オルデンベルグ (H. Oldenberg) が《Buddha》という、学問的レベルにおいて釈尊の生涯を明らかにした最初の書物が出版されます。このオルデンベルグの《Buddha》という書物は、仏教内部に伝持されている釈尊の生涯を記録したもので、それを仏陀の伝記(仏伝)といいますが、その仏伝の中から神話的部分を削除して人間仏陀を明らかにしようとしたものであります。仏教内部で釈尊の生涯を仏伝として意識的にまとめられたのは、少なくとも釈尊滅後、二百年程の後であるといわれています。その代表的なものが部派仏教の中で纏められた『大般涅槃經』であります。或いは、大乘仏教運動が起こる西暦紀元前後の頃に、仏伝文学が盛んに造られます。これらが仏教内部における釈尊の生涯に関する資料ですが、そういう仏伝には神話的な表現とか、フィクションとか、いろいろな要素が組み込まれています。そこで、オルデンベルグはそれらの要素を取り除きまして、人間仏陀というものを明らかにしようとして試みたわけです。いかにも合理主義的な解釈による一つの釈尊の生涯です。しかし、現在の歴史学では、

そういう神話的表現とかフィクションとか奇跡とか、そういったものをすべて取り除いたところに歴史的事実が明らかになるとは考えないでしょう。どうしてかと言えば、その神話的表現とかフィクションとか奇跡とかは、それによって何かを指示しようとしたのであって、その背景を見極めていくことによって歴史的事実がより明確にされていくからであります。従って、オルデンベルグの《Buddha》は、人間仏陀としての釈尊の生涯を明らかにしようとしたものではあるけれども、その合理主義的な試みには多くの欠点もあったわけです。その後、釈尊の生涯についての研究は、ヨーロッパにおいて進められ、ついに、一九四九年にいたって、フランスのパリから出版されましたフウシェー(A. Fouche)の《La Vie du Bouddha》が、釈尊の生涯についての、仏伝についての決定打となります。かれフウシェーの《La Vie du Bouddha》は、仏伝文学をはじめとして歴史学とか考古学などのあらゆる学問的な成果を踏まえたもので、これを越える研究はヨーロッパにおいて未だないといえます。

余計な話ではありませんが、私も大谷大学に入りまして、このフウシェーの書物のことを知り、すぐ丸善に注文しました。その頃は外国の書物は丸善を通して注文するということになっていたので、私もそうしたわけです。丸善に注文して取り寄せ、いざ読み始めましたが、十頁程読みまして読むのを止めました。要するに読めなかったのです。言語とか言葉というものは歴史があります。皆さんもこれから後期になりますと漢訳文献、つまり漢文を読む訓練をさせられますが、漢文も難しいです。何時の時代の文献かで、言葉の意味も微妙に違って来るわけです。言葉には歴史の背景があるわけです。そういう意味で、フウシェーのフランス語は、フランス語のもっている歴史背景を十分に踏まえて書かれた高級なといえますか、洗練された文章なのです。皆さん方の手元にあるような簡便な仏和辞典では間に合わなかったということですから。自分が読めなかった責任を辞典のせいにしてはいけません、ともかく、読むのを諦めていたわけです。そうしましたら、ヨーロッパ人にとってもそうであつたらしく、その後、一九六三年になってこの書物の英訳がアメリカから出版されました。どうも、英語とかドイツ語といったヨーロッパ語圏の人達にとつ

てもこのフウシエーのフランス語は難解であったということのようです。私もこの英訳を手に入れて、それを手掛かりに、ようやくフウシエーの文章を理解し、関心のある箇所を読みました。私の学生時代のことですが、このような思い出があります。

最後にもう一つ戯言を申してみたいと思います。それは、今度の研修旅行で、インドで仏教が盛んであった頃、仏教研究の中心地であったナーランダ仏教大学の跡を見学しますが、その遺跡の草原に座って考えたことです。仏教は十二世紀にインドから姿を消します。どうして姿を消したのであるか。私が大学生の時は、イスラム教徒がインドに侵入し、仏教寺院を破壊し、比丘・比丘尼を殺した、そのことによってインドから仏教は消滅したと、このように教えられました。が、どうももう一つ納得していません。一つの大宗教がそれほど簡単に消滅してしまうものなのだろうか。それでは何故ヒンズー教は消滅しなかったのであろうかと、多少すっきりしないものがあつたわけです。最も栄えたとき、六世紀頃には、ナーランダ大学には一万人もの学生が学んでいたといわれます。その後七世紀には有名な玄奘がナーランダ大学で学んでいます。その頃は少し衰微しつつあつたようですが、それでも数千人の学生が学んでいたわけです。歴大な遺跡を見渡しながら、これ程の大学がどうして簡単に減ってしまったのかと考えていましたら、簡単に消滅した理由が閃いたのです。何と簡単なことであつたかと。つまりこういうことです。人は飯を食わなければなりません。しかも、仏教の出家者は在家の人々の布施を仰いでその日暮をしながら、仏教の勉強をしていたわけです。従つて、ナーランダ大学の学生たちも出家者ですからそうしていたわけです。しかも、出家者是不殺生という戒律のため畑仕事はできません。生産者でなく専ら消費者だつたわけです。また、金品を手にすることはできないという戒律もありますから、皆さんのように仕送りを受けていたわけでもないのです。そうしますと、ナーランダ大学が維持されていくためには、それを支える強大な経済力が必要となります。すなわち、仏教に帰依し

た国王の庇護がどうしても必要であったわけです。数千人の学生が食事をする。勿論、食事は午前中一回だけで、午後からは一切固形物は口に入れられず、水などの形のない流動物しか飲めないという戒律がありますが、それでもそれは大変な分量の食料が必要になります。ナールンダ大学の回りは今は農村地帯ですが、かつては大都市であったというようにも見えず、今とあまり変わりなかったのではないかと思われれますので、数千人の学生たちの食事を準備し布施することはとても不可能といえましょう。従って、どうしても大きな経済力をもった国王の庇護というものがなければなりません。その国王が仏教に帰依していた国王からイスラム教徒の国王に変われば、すなわち、国王の庇護がなくなれば、簡単にギブアップしてしまふわけです。何と簡単なことかと気付いたのです。そして、仏教がインドから姿を消したのも、その消滅の大きな原因の一つとして同様なことが考えられるのではなからうかということです。大学や僧院が大きくなりすぎて、権力者の庇護を受けなければ維持できなくなっていた、それが仏教の消滅という事実の一つの原因となったのではないかと、そのことに気がついたわけです。それに対して、ヒンズー教の寺院というのは、大きなものもありますが、小さな祠のような寺院が無数にあると言ってよいほど、沢山あるわけです。これはよほどのことがあっても滅びません。これにひきかえ、仏教は国家の庇護を受けて栄えたという決定的な欠点を持っていた、そのために仏教は簡単に消滅してしまつたということになりましょう。

しかし、イスラム教徒による仏教寺院の破壊ということも相当徹底したものであったようです。イスラム教は偶像崇拜を嫌いますから、インドに行きまして博物館や仏跡にある仏像を見ますと、鼻が欠けていたり、耳が無かったり、首が落ちていたり、そういう石仏が沢山あります。多分、その多くは、自然に壊れたというよりも、イスラム教徒によって破壊された為であると思なされます。だからといって、このことだけで仏教が消滅したわけではないというべきでしょう。ともかく、インドにおいて仏教が盛大になったとはいえず、それが国王という権力者の庇護によって盛大になったという場合が多く、結果的には、それがインドからの仏教の消滅ということをもたらしただけで、大きな原因になつ

たということですが。

この他、インドから仏教が消滅した理由として、思想の方面から見ると、二つの理由が考えられます。その一つは、輪廻転生の主体としてのアートマン（我）というインド宗教にとって絶対に欠かすことのできない存在を仏教は否定したということ、もう一つは、仏教が大乗仏教となって後、ヒンズー教やバラモン教の影響を受け、次第に密教化したということ、この二つの理由が考えられます。アートマンの存在を否定したことは、輪廻転生の否定でもありません。実際には、仏教は積尊亡き後、法（*dharma*）の本質（*svabhava*）を实在視して輪廻転生を可能にしてしまいましたが、やはり、アートマンの否定（無我）は仏教がインド宗教の正統派になれなかった最大の理由であり、それが消滅の大きな原因になったといえます。また、仏教の密教化は、インド民族の習俗を受け入れたということであり、自ずとヒンズー教の中に仏教が埋没してしまう運命になっていったといえます。現に、今のヒンズー教徒たちは仏教はヒンズー教の中にあると言っています。現在の日本でも同じような傾向にあり、日本独自の輪廻思想（霊信仰）の中に仏教が埋没し、仏教の日本的な習俗化が進み、仏教とは似ても似つかぬ仏教となりつつあるといえます。

ともかくも、インドにおいて、仏教が国王の庇護をうけて栄えたということ、イスラム教徒に徹底的に破壊されたということ、アートマンを否定したこと、密教化したこと、これらが仏教がインドから姿を消した大きな理由ではないかと思えます。

時間がまいりましたので、お話をこの辺で終わりとさせていただきます。まことに内容の薄いお話に終わってしまいました。これから少し専門的に仏教を勉強しようとしている皆さん方に参考になったのかどうか疑問ですが、ともかく、最初に申したように、仏教を勉強するということは、単に仏教の知識を学び、物知りになるということではないのでありまして、自分というものを明らかにし、自分の生き方を仏教に問うことによって、現在の自分が納得して

いる尺度を一度取り外し、より豊かな尺度を仏教から学んでいくということではなからうかと思えます。そういう意味で、今回のインド研修旅行は仏教の学びの大切な一つであると言えます。仏教学会の会員となられた皆さん方の今後の勉学に大きな期待をもって、お話を終えたいと思います。

《参考書》

山崎元一著『アショーク王伝説の研究』（春秋社）

山口 益著『フランス仏教学の五十年』（平楽寺書店）

寺本婉雅著『ターラナータ印度仏教史』（國書刊行会）